

沖縄に基地を押しつけない市民の会

95年の少女暴行事件が与えた衝撃は大きい。

全ての基地をなくすという闘いで、いっこうに基地を減らすことができず、また米軍の犯罪を防ぐことすらできない事実を突き付けられた。

日本(大阪)にいる沖縄人として「日本人とどう向き合ってきたのか、私はなぜこんなめにあわなければならないのか」と苦しむ少女の沈黙の音が耳から離れない。

その時、米軍の加害者への怒りだけでなくある種共犯しているような恐怖と不安と悔しさが押し寄せ、そこに「連帯」という言葉で日本人に迎合している姿でしかない私がいる。これは連帯ではない。しかしその後もまた日本人は沖縄と「連帯」しようと叫び続け、その時投げかけた「連帯」できていなかったという事実を受け止めることから始めようという声は届かない。

そんな中、「沖縄に基地を押しつけない市民の会」が結成された。

「連帯する」のではなく「連帯とは何か」を考え続け、沖縄に基地を押し付けているという日本(本土)側の立ち位置をはっきりさせることに重点を置いて取り組んできた。

その頃沖縄で「普天間基地は県外へ」という声があがりはじめていた。

その声は沖縄でも本土でも拒絶されながらも、その両者の関係を揺り動かしてきた。それは「沖縄に基地を押しつけない市民の会」としては共有できるものであった。あれから十数年が経って今沖縄では県外移設が多くの人々の共通認識になっている。にもかかわらず、それに応えるべく基地を引き取るという声がなかなかあがってこなかった。(そこには全ての基地をなくすということがもつ正しさの暴力の問題があるように思う)

やっとこの3月から大阪に基地を引き取るという人たちが活動を始めた。

今回の取り組み(共催)が沖縄と日本の立ち位置を明確にすることで二項対立と思っていた関係性が対立ではなく、(あえて「連帯」とは思わず)対等な関係への「出会い直し」の始まりになればと思っている。

その先に連帯があるはずだ。

沖縄差別を解消するために 沖縄の米軍基地を大阪に引き取る行動

略称「引き取る行動・大阪」

日本の沖縄への態度を何と言い表せばいいだろうか。

圧力、強行、恫喝、暴力、差別・・・?

沖縄の米軍基地建設反対を訴えるために、

これまで色々な言葉を使ってきた。

でも、それらの言葉を使えば使うほど、

架空の出来事のように自分からは離れていった。

自分ではない誰か別の人が

沖縄に対してふるっている態度のような気がしてきた。

私が米軍基地反対のために使っている言葉は結局、

自分のための、自分の平和で安全な日々を守るための言葉でしかなかった。

沖縄の基地を引き取る行動を始めるまで長い年月がかかった。

それは、揺るぎなく、自分の立場を認識することであり、

その立場から自分がふるっている暴力や

差別の責任を負おうとする行為でもあったから。

これらの経験を不安に思う人がいるかもしれない。

自分の安寧を脅かす、足元がぐらつく行為だと。

でもそれは違う。

これは自分の足でしっかり立つという、

自分でしか決められない確かな経験だと思う。

ある沖縄の人はそれを「超かっこいい生き方!」と言っていた。

基地を引き取ると決めることで、前に進むことがけっこういっぱいある。